

『のら』の相手で疲れ果てた『マナ』は、溜息をつき座り込んだ。その時『のら』が『の』の字を書き込んだ風呂敷に目が留まった。『マナ』は『のら』が風呂敷包みを開けているところを実は見たことが無く、風呂敷の中に何が入っているのか知らなかった。『マナ』は『のら』に尋ねた。「この中には何が入ってる。すると『のら』は「これ」と言っていて、風呂敷の中身を出し始めた。特に秘密にしていた雰囲気はなかったようである。中には食べかけの魚の干物と、スカートの様な薄汚れた服が入っていた。魚の干物を『マナ』に見せ、「食べる」と言っていて『マナ』に差し出した。『マナ』は眉をひそめて首を横に振った。次に『のら』はスカートを取り出し広げた。その時何かが落ち、コロコロと部屋の外に転がり出ていった。『のら』はそれを慌てて追い掛けて行く。外の草むらを探すと、そこには綺麗な指輪が転がっていた。じっと見ていた『のら』は、それを『マナ』に盗られてしまつと考え、そつとその場に埋めてしまった。部屋に戻ってきた『のら』を見て、『マナ』は「あったか」と聞く。『のら』は「あった」と言っていて首を縦に振った。『マナ』は「何と聞くと、」のら』は「内緒。宝物」と言っていてそれ以上は教えなかった。

しかし汚い風呂敷とスカートだと『マナ』は思った。そう言えば『マナ』は、『のら』自身が風呂に入っているのを見たことがなかった。『のら』、風呂に入っているかと『マナ』は尋ねた。すると『のら』は『マナ』の顔を見ながら首を縦に振った。『マナ』は『のら』の首根っこを捕まえ、風呂場に運んで湯船に放り込んだ。そして嘘をつけ。本当は一度も入ったこと無いだろう」と言った。『のら』は湯船の中で溺れていた。どつちやら足が着かないようである。



©Benjamin Roots